



| | |
|------------------|---|
| Title | M.S. ヴォロンツォフ研究の視角と展望 (1) : カフカス全権総督(1845-1854)の統治政策を中心に |
| Author(s) | 花田, 智之; Hanada, Tomoyuki |
| Description | 研究ノート |
| Citation | 北大法学論集, 57(2), 368[117]-336[149] |
| Issue Date | 2006-07-31 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/14539 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 57(2)_368-336.pdf |



M.S. ヴォロンツォフ研究の視角と展望（1）

—カフカス全権総督(1845-1854)の統治政策を中心に—

花 田 智 之

<はじめに> M.S. ヴォロンツォフ研究の視角（本号）

<第一章> M.S. ヴォロンツォフの略歴（本号）

【第一節】 生誕からイギリス時代まで（1782-1800）

【第二節】 カフカス陸軍中尉からナポレオン戦争まで（1801-1815）

【第三節】 パリ占領軍ロシア最高司令官時代（1815-1819）

【第四節】 新ロシア総督時代（1823-1844）

【第五節】 カフカス全権総督時代（1845-1854）

（一）カフカスでの「内憂外患」

（二）ザカフカスでの「新統治」

（三）カフカス戦争での「新戦略」

【第六節】 総督引退と晩年（1854-1856）

【小 括】 M.S. ヴォロンツォフ研究の意義

<第二章> M.S. ヴォロンツォフ先行研究の動向（次号）

【第一節】 ロシア帝国時代の先行研究について

【第二節】 ソ連時代の先行研究について

【第三節】 現代の先行研究について

<おわりに> M.S. ヴォロンツォフ研究の展望（次号）

＜はじめに＞ M.S. ヴォロンツォフ研究の視角

ミハイル・セミョーノヴィッチ・ヴォロンツォフ最高公爵¹（1782-1856：以下「M.S. ヴォロンツォフ」と略記）が亡くなって、今年2006年で150年目を迎える。いまロシア国内で彼についての研究が大きな盛り上がりを見せている。本論文では、1845年から54年までカフカス全権総督およびカフカス軍最高司令官²を務めた M.S. ヴォロンツォフというイギリス育ちのロシア人帝国貴族の華々しい行政軍事キャリアと、彼に関するロシア研究史の動向を、最近の先行研究とあわせて紹介したい。

本論文は大きく二つの目的を有している。第一に、私の研究テーマである M.S. ヴォロンツォフによるザカフカス³での内政と、カフカス戦争での軍事戦略を合わせたカフカス全体での統治政策を理解する上で、彼の人物像それ自体に注目することが不可欠であり、その意味での学術的寄与を目的とする。詳細は本論文で明らかにするが、M.S. ヴォロンツォフという人物は19世紀前半のロシア貴族として異色な経歴の持ち主であった。幼少期をイギリスで過ごし当時の啓蒙主義や自由主義に触れながら、フランス革命をロンドンで経験した。青年期は父親 S.R. ヴォロンツォフ駐英大使の外交業務を手伝いながら、ヨーロッパ各地で多くの知己に恵まれた。そして彼の行政軍事キャリアには、こうした彼の生い立ちの影響や彼独自の個性的な諸政策を随所に窺うことができる。それゆえ彼の最後の赴任地となったカフカスでの統治政策を研究するため、それ

¹ M.S. ヴォロンツォフの略歴に関する人物事典。Отечественная История с древнейших времен до 1917 года. Москва, 1994. Т.1. С. 459., Российский Биографический Словарь.

² командующий Отдельный Кавказский корпус и наместник Кавказа с неограниченными полномочиями. 役職 **наместник** と **генерал-губернатор** には様々な訳語があり、前者を「太守」として後者を「総督」とするものや、前者を「総督」として後者を「特別知事」と区別して訳している場合がある。本論文では岩波ロシア語事典に依拠しながら、**наместник** を「総督」と訳した上で、皇帝からの全権委任 **с неограниченными полномочиями** という権限が付与されていた歴史的事情を鑑みて「全権総督」という訳語を用いた。

³ 一般的に、カフカス山脈の南側でグルジア、アゼルバイジャン、アルメニアなどに相当する地域を「ザカフカス」、カフカス山脈の北側を「北カフカス」とし、カスピ海と黒海に挟まれた地域の総称を「カフカス」と定義する。

に先立つ彼の個人史を理解することが極めて重要であると考える。

それと同時に、カフカス全権総督という役職がM.S. ヴォロンツォフのカフカス赴任とともに新設された制度であり、それ以前のカフカス長官職よりも裁量や権限が大きかったことに注目しなければならない⁴。つまりM.S. ヴォロンツォフの就任した全権総督は、個人の裁量が最大限に発揮される制度的保障があったことから、彼個人を理解することが重要となる。なお、私はここで「統治」という言葉を「特定の少数者が権力を背景として集団に一定の秩序を付与しようとする事（阿部齊）」という意味で用い、具体的には支配体制の存在やそれを実行する行為、または支配を実体化する機関や制度の存在を表すものとする⁵。

本論文の第二の目的は、日本ではほとんど知られていないM.S. ヴォロンツォフ研究を、本研究の依拠した先行業績として紹介することで、日本のロシア史研究に学術的貢献をなすことである。19世紀ロシア帝国とカフカス統治に関する先行研究では、東京外国語大学の高橋清治教授が1997年「帝国のカフカス支配と『異族人教育』⁶」という論文を発表されており、そこでは通史的關係を知ることができる。同教授はまた、1905年カフカス総督を務めたヴォロンツォフ・ダシコフと大臣会議の歴史研究もされている⁷。そして東北大学の北川誠一教授は、ザカフカスをめぐるロシア、ペルシア、オスマントルコの国際関係史を研究されており、カフカスの民族学的複雑さを知ることができる⁸。

しかしながらM.S. ヴォロンツォフ研究としてのカフカス統治研究や、彼の人物像や政治姿勢を体系的に研究したものはなく、本論文によってM.S. ヴォロンツォフ研究の学術的な意義が「再発見」されることで、ロシア史研究の発展に貢献できればと願う次第である。また本論文はM.S. ヴォロンツォフとい

⁴ カフカス全権総督は法案を独自で採択する権限を有し、中央からの独立性において例外的存在であった。Полное Собрание Законов Российской Империи (далее. ПСЗ). Т.69. №. 18702, 18679. (1845).

⁵ 阿部齊「統治」『平凡社大百科事典』。

⁶ 『ロシア史研究』（第60号、1997年）。73-82頁。

⁷ 高橋清治「ロシア帝国とカフカス総督府」『ロシア史研究』（第59号、1996年）。36-53頁。

⁸ 北川誠一「ザカフカスにおける国際政治と民族問題」『講座スラブの世界2 スラブの民族』（弘文堂、1995年）。275-299頁。

う人物を通して、単にカフカス統治の考察にとどまらない、ロシア帝国史全体の統治政策の実証研究の一つとして、また現代ロシアの抱える「ロシアとカフカス」という難問に対し、これまで「衝突」ばかりが注目されてきた中で、統治という政治史の観点から、新たな視座をもちたすことができると確信している。

以下、第一章では彼の略歴について、彼の生い立ちと歴任した行政軍事キャリアを中心に詳述してゆき、ロシア人帝国官吏としての実像に迫る。そして第二章では、彼についてのロシアでの研究史の流れを見ながら、M.S. ヴォロンツォフ研究の展望とその学術的な意義を示してゆく。なお本論文では、グレゴリウス暦を用いる。

<第一章> M.S. ヴォロンツォフの略歴

Полу-милорд 半ば英国紳士であり Полу-купец 半ば商人であり
Полу-мудлец 半ば哲学者であり Полу-невежда 半ば無知であり
Полу-подлец 半ば下郎であり Но есть надежда しかし希望はある
Что будет полным наконец 最終的に（彼は一筆者）何になるのでしょう
【拙訳：プーシキン「ヴォロンツォフ」(1824)⁹】

ロシアで最も親しまれている詩人プーシキンの作品の一つに、M.S. ヴォロンツォフが登場する。学術世界での知名度を除けば、彼はこの詩で描かれた人物として、そしてプーシキンの恋敵として広く知られている¹⁰。

⁹ 『プーシキン全集』。Полное Собрание Сочинений. Академия Наук СССР 1947. II-1. С. 317.

¹⁰ M.S. ヴォロンツォフは新ロシア総督時代、プーシキンを領内に保護して著作活動を奨励したことで知られる。Удовик В.А., Кацки В.О. М.С.Воронцов и А.С.Пушкин. СПбГУП, 1997. しかし1824年プーシキンは無神論を肯定した手紙を押収され、プスコフ県ミハイロフスコエ村への謹慎処分を受けた。この事件の背景には、プーシキンがM.S. ヴォロンツォフの妻エリザベータとの不倫関係に陥り、それがM.S. ヴォロンツォフの知るところとなったために新ロシアを追放処分になったという事情もあった。本章冒頭で示した詩は、プーシキンが新ロシアを追放された直後に書いたとされる、エピグラムである。

M.S. ヴォロンツォフは、19世紀前半ロシア帝国のなかで華々しい三つの行政軍事キャリアを見せたことで、歴史にその名を残している。一つは「ナポレオン戦争の英雄」という軍人の業績、一つは新ロシア（ノヴォロシア）総督およびベッサラビア総督という行政官の業績、そして三つ目がカフカス全権総督およびカフカス軍最高司令官という行政軍事の業績である。本章では彼の主な略歴を、生誕からイギリス時代、カフカス赴任からナポレオン戦争、バリ占領軍ロシア最高司令官時代、新ロシア総督時代、カフカス全権総督時代、総督引退から晩年までの六つに分けてそれぞれ見てゆく¹¹。詳細な歴史は、本論文末にある年表（次号）を参照して頂きたい。

【第一節】生誕からイギリス時代まで(1782-1800)

M.S. ヴォロンツォフは1782年5月19日、首都サンクトペテルブルグの中心部マラーヤ・モルスカヤ通りで生まれた。ヴォロンツォフ家は代々ロシア有数の名門貴族で、彼の曾祖父 I.G. ヴォロンツォフ（元ロストフ知事）、祖父 R.I. ヴォロンツォフ（元ウラジーミル県知事でロシア・フリーメイソンの中心人物）、祖父 M.I. ヴォロンツォフ（元ロシア宰相）、叔父 A.R. ヴォロンツォフ¹²（ロシア宰相を勤めながら国家評議会の設立などの国家改革に尽力）、叔母 E.R. ダシコワ（帝国サンクトペテルブルグ科学アカデミー初代院長）に代表される、国家の中心人物を数多く輩出していた。ヴォロンツォフ家の祖先はヴァイキング出身セミョーノフ・アフリカノヴィッチであるとされており、11世紀に北ゲルマンからキエフを訪れて、ヤロスラフ賢公の治世を助けながらロシア正教を受け入れた。そして14世紀後半ドミトリー・ドンスコイの時代にセミョーノフの子孫フョードル・ヴァシリエヴィッチが「ヴォロネツ」¹³という姓名を与えられ

¹¹ 略歴は人物事典のほか、以下の文献を参照。*Щербинин М.П. Биография генерал-фельдмаршала князя Михаила Семеновича Воронцова. Спб., 1858., Захарова О.Ю. Генерал-Фельдмаршал Светлейший Князь М.С.Воронцов. Москва, 2001., Удовик В.А.Воронцов. Москва, 2004., Rhineland, A.L.H. Prince Michael Vorontsov: Viceroy to the Tsar. McGill-Queen's University Press, 1990.*

¹² *Удовик В.А. Символ Веры А.Р.Воронцов. // Воронцовы - Два века в истории России Вып.1. 1991. С. 7-33.*

て、以後ヴォロンツォフになったと記録されている¹³。

M.S. ヴォロンツォフの父親 S.R. ヴォロンツォフは、幼少より彼の叔父にあたる M.I. ヴォロンツォフによる熱心なロシア愛国教育を受けて成長し、ルミャンツェフ司令官やスボロフ司令官のもとで数々の軍事功績を挙げた。しかし1762年クーデター以後はエカテリーナ 2 世との政治的な確執のため、一時期イタリアで静養していたが、1782年ヴェネチア大使として外交職で国政に復帰して、1785年イギリス大使に任命された。そして M.S. ヴォロンツォフは 2 歳のときに肺結核で母親エカテリーナを亡くしたこともあって、1786年父親と妹キャサリンとともにイギリスのセント・ジェームス宮内での生活を始めることになった。

イギリスではローザンヌ出身のスイス人ジョリが専属の家庭教師となり、フランス語や英語をはじめとしてギリシア語、ラテン語などの幅広い語学力を身につけた。またヨーロッパの知的教養に触れる機会に恵まれ、聖書や教会文学だけでなく、ホラティウス、カエサル、キケロ、タキトゥスなどのローマ古典に関する数多くの著作や、ヴォルテール、デイドロ、エドモンド・バークなど同時代の作品にも通曉していたことが知られている。

しかし、彼の教育環境にもっとも影響を与えたのは、父親 S.R. ヴォロンツォフと叔父 A.R. ヴォロンツォフによる、ロシア愛国教育であった。彼らは M.S. ヴォロンツォフがヨーロッパ文化に親しんで知的教養を深めることを積極的に推進した一方、自分たちが M.I. ヴォロンツォフに施されたように、あくまで祖国ロシアへの忠誠心や献身さを名門ロシア貴族として誇りに思うことが最も重要な教育課題でありまた義務であると考え、M.S. ヴォロンツォフに対して母国語であるロシア語の教育を徹底させた。毎日ロシア文学やロシア史の勉強に多くの時間が費やされ、また貴族として乗馬の訓練や森林の散策（プログルカ）も実施された。

こうして M.S. ヴォロンツォフは、幼少期よりイギリスで多くのヨーロッパ文化に触れながらも、あくまで「ロシア人」として育てられ、その意味で祖国ロシアへの愛国心を強く抱いた人物であったと見られる。彼には「出身だけでなく、何よりも精神的にロシア人であること¹⁴（ザハロワ）」が求められ、成長

¹³ Акты, Собранные Кавказскою Археографическою Комиссию (далее. АКАК). Т.10. Тифлис, 1885. С. VII.

¹⁴ Захарова О.Ю. Указ.соч. С. 24.

とともに親英派のロシア貴族という意識を自他ともに強くするようになった。また愛国主義教育上の配慮から、彼はイートン校に入学することはなかった。これはイートン校が掲げている政治第一主義というエリート精神には共鳴していたものの、イートン校での体罰への懸念や、また学内の団結性を深めることが家族からの自立を促して、ヴォロンツォフ家という血縁や祖国ロシアを忘却することを危惧されたためと考えられている¹⁵。

そしてM.S. ヴォロンツォフは16歳のときに父親の秘書としてヴェネツィアやパリなどのヨーロッパ歴訪に同行した。そして彼は青年期にヨーロッパで多くの知己に恵まれることで、当時の啓蒙主義や自由主義を幅広く学ぶ機会を得た。ナポレオン戦争で戦友かつ連合軍最高司令官となるアーサー・ウェズレイ（のちのウェリントン公）とは、このときに親交を深めている。

ここで重要なのは、19世紀前半のロシア帝国でM.S. ヴォロンツォフのようにイギリスを中心としたヨーロッパ社会で啓蒙主義や自由主義を学ぶという経歴が、とても異色であったという点であり、これは彼の政治姿勢をロシア帝国のなかで第三のものとした大きな要因だったと考えられる。というのも当時のロシア帝国において、啓蒙主義の多くはエカテリーナ2世の時代に若者を中心に普及したフランス的な啓蒙主義に影響を受けたものが多く、19世紀前半には君主制と農奴制を廃止するというデカブリスト的な民主主義の源流ともなった。他方、ロシア大貴族を中心にこうした急進的な啓蒙主義に反対するかたちで、君主制と農奴制を堅持してゆく保守的な政治姿勢が、いわば反フランス革命そして民主主義への反動として存在していたのである。

この中でM.S. ヴォロンツォフは、ロシア皇帝への絶対的な忠誠を示しながらも、農奴制の段階的な解放と農民階級の身分保障を主張するという、どちらの政治姿勢にも属さない独自の立場を貫いた¹⁶。彼の思想的背景にはヨーロッパで生まれた啓蒙主義と、ロシア名門貴族ヴォロンツォフ家での愛国教育とが融合した、ロシア帝国における第三の政治姿勢という歴史的結実を見ることができる。

そして彼のこうした独自の政治姿勢は、その後の行政軍事キャリアのなかで

¹⁵ Там же. С. 27-29.

¹⁶ Микешин М.И. М.С.Воронцов. Метафизический портрет в пейзаже. Монография. // Философский век. Альманах. Вып.2. СПб., 1997.

随所に窺うことができる。この観点から、彼のヨーロッパでの成長過程を理解することは M.S. ヴォロンツォフ全権総督によるカフカス統治研究を進めるため、歴史的に極めて重要だと考えられる。

【第二節】 カフカス陸軍中尉からナポレオン戦争まで(1801-1815)

1801年9月、およそ16年振りにペテルブルグに帰還した M.S. ヴォロンツォフは、侍従位として皇帝直属ブレオブラジェンスキー連隊に加わった。しかし彼はペテルブルグでの貴族生活を避け、自ら志願して陸軍中尉としてカフカス部隊に入隊した。当時ロシアが併合したばかりのザカフカス（東グルジア）は、南東に位置したガンジャ要塞をめぐるペルシアとの戦役が続いていた激戦地であった。青年 M.S. ヴォロンツォフの行政軍事キャリアは、奇しくもザカフカスへの赴任から始まることになる。

1803年9月トビリシに到着した彼は、カフカス長官ツイツィアノフのもとで砲兵部隊に属してペルシアとの戦役で参戦し、翌年4月ガンジャ要塞の占領に貢献した。そしてイメレチ王国（西グルジア）併合においては、自身の外交能力を活かす渉外の場面でも活躍した。しかし1805年オセチア遠征にて発熱を起こしたため戦線を離れ、モスクワでの静養を余儀なくされる。彼のザカフカス赴任はここで一端、終わりを告げるが、のちの彼の自伝の中でこの時のグルジア赴任が「私のキャリアの中で最も危険に満ちていながら、同時に最も活発で、最も興味深いものであった *j'ai toujours considere le temps passe en Georgie comme le plus actif, le plus interessant, comme aussi le plus perilleux de tout le reste de ma carriere*」と回想している¹⁷。

モスクワで健康を回復した彼は、1805年から1807年までポメラニア地方でスウェーデン軍との戦争を繰り返し、大佐に昇進した。そして1807年ティルジットの和約のあとは黒海西岸のドナウ川流域でオスマントルコとの戦争に参戦し、そこで若き A.P. エルモロフや I.F. パシュケヴィッチ（両者とものちにカフカス長官となる）と出逢いながら、互いに数々の戦功を重ねた。そして1812年8月ナポレオン軍とのボロディノ会戦ではバグラチオン軍少将として参戦したが、緒戦のセミョーフ突角堡での防衛で砲弾が足に当たり、大怪我をした。

¹⁷ Архив Князя Воронцова. (далее. АКВ). Кн.37. Москва, 1891. С. 43.

そして治療のため戦場を離れてモスクワの別荘で静養するが、その別荘を軍事病院（のちにウラジーミル市アンドレフスコエ村へと移転）として一般開放することで、負傷兵士たちの手当てやモスクワ大火の救援活動などに大きく貢献した¹⁸。

そして半年後に復員すると、ライプチヒでの「諸国民の戦い」ではその戦果から聖アレクサンドル・ネフスキー勲章を授与され、1814年2月23日彼の名声を大きく高めたクラオンスの戦いでは、プロイセン軍ブルツヒャー司令官とともにナポレオン軍に大勝利を収め、1815年パリ占領ではロシア軍第12師団を率いた。これこそ M.S. ヴォロンツォフが「ナポレオン戦争の英雄」と呼ばれる所以である。

【第三節】パリ占領軍ロシア最高司令官時代(1815-1819)

1815年から1819年までの4年間、M.S. ヴォロンツォフはパリ占領軍ロシア最高司令官（以下「パリ最高司令官」と略記）として、イギリス連合軍最高司令官ウェリントン公とともにロシア軍第12師団を指揮した。この人事には A.P. エルモロフも候補者に名前が上がっていたが、ヨーロッパでの生活が長くそして外国語が堪能な M.S. ヴォロンツォフに対して、アレクサンドル1世からの絶大な信頼があったこと、そしてウェリントン公とのイギリス時代からの親交関係が人事に大きく作用したと考えられている¹⁹。

しかしながら、彼のパリ最高司令官としての任務は困難を窮め、とりわけ占領軍の資金難と現場兵士たちの士気を維持するという、二つの課題に対処せねばならなかった。ロシア本国ではナポレオン戦争後の財政再建のために陸軍維持費の大幅な削減が決定されて、パリ占領軍への資金提供はほとんどなく、パリ占領軍にはあくまで自給自足が求められた。この中で M.S. ヴォロンツォフはアレクサンドル1世やウェリントン公との共通了解であった、パリ占領軍の現場兵士たちの士気を高く維持することで「フランス国民との友好的な関係」を築くことを最優先に考えた。これは連合軍によるパリ占領が、戦後フランスの経済的疲弊や治安回復の支援を目的としていただけでなく、ルイ18世の王政

¹⁸ Удовик В.А. Воронцов. С. 71-85.

¹⁹ Захарова О.Ю. Указ.соч. С. 116.

復古したブルボン王朝を「ヨーロッパの平和」のために支持するという外交的役割をも担っていた。このため M.S. ヴォロンツォフは、現場の最高責任者としてフランス国民の「沈静化」を意識しながら、彼独自の手法でパリ占領軍の運営管理に着手していった。

彼はまず、第一の課題であった占領軍の資金難を打開するため、彼個人の所有していた私財（絵画や土地など）を売却して、イギリスから靴やコートなどの衣類、小麦、食塩、クワス醸造用のライ麦などの食糧を大量に輸入した。次にロシア軍の衛生管理を改善するため、兵舎にロシア式サウナ（バーニャ）を設置し、また石鹸用洗剤を同じくイギリスから大量に輸入することで疫病の発生を未然に防止した。そしてヨーロッパでの人的ネットワークを駆使して資金調達しながら、占領軍の維持費を確保した。これ以外の成果として、パリの設計、建築、機械に関する先端技術をロシア本国で普及させ、ペテルブルグの工学教育に大きな発展をもたらした²⁰。

二つ目の課題であった現場兵士の士気の維持については、彼は大きく三つの方策で対処した。第一に、軍隊内の規律を厳正にすべく1815年『第12師団下級歩兵の対処規則²¹』と『第12師団 M.S. ヴォロンツォフ将校教令²²』の二つの内部規則を制定した。これはパリ占領軍において、それまで下級兵士の軍事裁判での不正が横行していたことから、M.S. ヴォロンツォフはパリ最高司令官としてだけでなくロシア軍全体の改善のために、下級兵士への人道的な扱いと貴族将校のモラル向上を求めて新たに規則を制定し、ロシア軍隊内の意識改革を目指したのである。これは同時に、犯罪を犯した兵士を厳正に処罰することで占領軍への信頼を高めるという効果も有していた。

第二に、ロシア本国から牧師を招聘して各部隊に従軍牧師として配置させた。そして兵士たちのキリスト教信仰を奨励することで、宗教的遵守によって占領軍の規律を整え、士気を維持することを目指した。これは戦線という生死を賭けた現場で、兵士たちに「心の拠りどころ」をもたらす効果も有したと考えら

²⁰ Rhinelander. pp. 29-30.

²¹ Правила для обхождения с нижним чинами 12-й пехотной дивизии. // Военный Сборник. 1859. Февраль. С. 495-502.

²² Наставления, данные М.С.Воронцовым гг. офицерам 12-й дивизии. // Военный Сборник. 1859. Май. С. 75-78.

れる。そして第三には、フランスでの長期滞在となった兵士たちがロシア本国に手紙を書けるように、パリ駐留軍内で郵便制度を確立し、それに合わせて初等言語教育ランカスター方式（イギリス人教育家ジョセフ・ランカスターが考案した教育法。まず最初に教師が上級生を教え、それから上級生が下級生を教えるという段階的な教育方式）を採用した。そして読み書きのできる将校が兵士たちに文字を教え、次に兵士たちが交互に教え合うという方法で、ロシア人兵士の識字率を向上させた²³。

こうしたパリ最高司令官 M.S. ヴォロンツォフによる、ヨーロッパでの青年期の人的物的ネットワークや、啓蒙主義という知的財産を活用した彼独自の軍隊指揮によって、パリ占領軍はフランス国民との大きな混乱なく任務を全うすることに成功した。そして彼はロシア帰国後に、輝かしい軍功とパリ最高司令官としての功績を讃えられ、聖ウラジーミル勲章（第一位）を授与した。

しかしながら、ペテルブルグに戻った彼への周囲の反応は、必ずしも礼讃ばかりではなかった。反発の主な原因は、彼が1819年アレクサンドル1世への直々の報告書の中で、パリ占領軍内で制定した内部規律について説明し、これを範例としてロシア軍の改革を訴えたからであった。そして具体的には下級兵士への軍規律違反に対する処罰の軽減や体罰の制限、また遂行された刑罰を業務日誌に記録することや、ロシア人将校のモラル教育などを主張した。

こうした彼の提案は貴族将校からの強い反発を招いてしまい、実際に採用されることはなかった。また A.S. メンシコフと創設を試みた農奴解放協会についても、アレクサンドル1世の十分な同意が得られず、彼が祖国ロシアのために掲げた改革案はいずれも実現しなかった。むしろこれらの出来事を通して、彼は「反ロシア的」思考として、次第にデカブリストとの関係を噂されるようになり²⁴、ロシアにとって危険な人物と考えられるようになってしまった。そのため彼は自ら軍人を引退し、暫らく公務を離れる決断をしたのである²⁵。

²³ Захарова О.Ю. Указ.соч. С. 116.

²⁴ パリ占領軍に加わったロシア人将校の中には、パリの言論空間の影響で民主主義に強く傾倒した者も見られ、彼らの一部がのちのデカブリスト運動の中心的な役割を担った。アナトル・マズーア『デカブリストの反乱』武藤潔・山内正樹訳（光平堂、1983年）。

²⁵ 公務を離れてからは私的にパリに戻って、ポーランド出身のブラニカ家（ポチョムキンの遠縁）の令嬢エリザベータと1819年4月20日に結婚した。

【第四節】新ロシア総督時代(1823-1844)

1823年5月 M.S. ヴォロンツォフは約4年間の長期休暇を経て、新ロシア総督およびベッサラビア総督に就任することで公務に復帰した。新ロシアはもともとエカテリーナ2世の時代に獲得した黒海に面した広大な領土であり、オスマントルコとの間で幾多の会戦が繰り返された、いわばロシア帝国における前線地域であった。また黒海は、地中海とロシア帝国を海路で結ぶヨーロッパ貿易の拠点としても経済的に重要であり、これまで新ロシア総督にはフランス系貴族が任命されていた²⁶。M.S. ヴォロンツォフは将来のロシアのために黒海沿岸の安全保障が政治経済的に最優先課題であると考え、アレクサンドル1世からの就任要請を快諾した²⁷。これは自身の政治姿勢がデカブリストの主張する「君主制の廃止」には反対であることを明示し、幼少期より培った祖国ロシアへの愛国心を行政官として証明するためでもあった。もっともこの人事は、ペテルブルグからヨーロッパ啓蒙に傾倒した M.S. ヴォロンツォフを追い出そうとした、中央貴族の政治的差し金があったともされている²⁸。

新ロシア総督に就任した M.S. ヴォロンツォフは、オデッサとクリミアを中心とした南ロシアでの政治経済圏の確立と、ベッサラビアでの「東方問題」を含めた黒海沿岸でのロシア帝国領の拡大、そして彼の在任中に何度も悩まされた疫病対策という都市衛生についての課題に取り組むことになった。この中で本論文で注目すべきことは、彼のパリ最高司令官のときと同様、新ロシア総督の統治においてもイギリスを始めとしたヨーロッパとの人的・物的ネットワークの多方面にわたる活用や、啓蒙主義の影響を受けた諸政策を見ることが出来る点である。これは M.S. ヴォロンツォフ研究という彼の人物像を捉えながら統治政策を分析する手法によって明らかになる学術的意義である。そしてオデッサはおよそ20年間でペテルブルグ、モスクワに次ぐロシア第三の商業都市

²⁶ M.S. ヴォロンツォフの前任はアレクサンドル・ドゥ・ランゲロン伯爵（任期1815-1822年）で、彼の前任は A.E. リシュリユー公爵（任期1803-1814年）であった。両者とも新ロシア総督としてヨーロッパやオスマントルコとの黒海貿易の発展に尽力した。とりわけリシュリユー公爵は、黒海沿岸の港湾整備や新ロシア農業発展に貢献したことで知られる。Rhineland. pp. 58-64.

²⁷ Щербинин М.П. Указ.соч. С. 166.

²⁸ Захарова О.Ю. Указ.соч. С. 172.

として飛躍的な繁栄を見せた。以下、彼の統治政策を行政、経済、文化の三つに分類して見てゆくことにする²⁹。

彼は第一の行政政策として自分の副官を新たに四名任命し、それまで新ロシア総督に集中していた行政業務を分散して事務処理の効率化を計った。そして新しいロシア官房を創設して、総務、軍事、医療の三部局（1827年以後は総務、法務、ベッサラビア、医療、会計の五部局に再編）を設置することで行政改革につとめた。また「ヴォロンツォフ・スクール³⁰」と呼ばれる、M.S. ヴォロンツォフと政治理念を共有した若手ロシア官吏たちを新ロシアで積極的に登用し、農業、財政、教育、新聞、金融、地理、統計、林業などそれぞれの専門家集団を育成していった。

また宗教政策として、キエフにある聖ソフィア大聖堂を再建する一方、クリミア・タタールやザパロージェ・コサックに農場や漁場という一定の生活圏を保証した。そしてモロカン派やドゥホボル派、ユダヤ教徒などの宗教マイノリティに対しては寛容政策と宗教的自治を認めることで、現地エリートとの良好な関係を維持した³¹。

第二の経済政策では、彼はまず1823年オデッサの経済発展のために当時イギリスから最先端技術であった三十馬力の蒸気船を輸入して、それをモデルにロシアでの蒸気船産業を積極的に推進した。そして1828年ロシア蒸気船会社を黒海で創業させて、ヤルタから蒸気船「オデッサ号」をヨーロッパに向けて出航した。1833年にはオデッサ＝コンスタチノーブル間の通行連絡船事業を開始

²⁹ 本論文では分析上、行政、経済、文化という三つの政策分類をしたが、三者は相互に影響し合っている。例えば彼の宗教政策での寛容主義は、宗教指導者を現地エリートと理解した上で行政政策に含めたが、文化政策としての側面も有している。また文化政策として分類した新聞政策は、情報の流通という観点から経済政策としての効果を有したとも指摘できる。

³⁰ 有名なのはA.I. リョブシン（オデッサ特別市長）、Z.S. ヘルヘウリゼフ（ケルチ市長）、V.I. トゥマンスキー（コンスタチノーブル大使。のちに国家官房長官秘書）、M.P. シェルビーニン（秘書。のちに国家検閲委員）、N.N. ムルザケヴィッチ（オデッサ・ギムナジヤ教師）、Y.A. ガガーマイステル（『古代ロシアの財政研究』の著者）などである。Захарова О.Ю. Указ.соч. С. 208-217.

³¹ Фельдман Д.З. М.С.Воронцов и Еврейское население южной России в первой половине XIX в. // Воронцовы - Два века в истории России. Вып.5. 2000. С. 87-100.

し、これにより黒海での物流はクリミアを中心として飛躍的に増大させて、また幹線道路や港湾などの交通インフラも整備された。

次に彼は、ロシア本国や外国からの入植者の受け入れを積極的に奨励し、新ロシアの農業、林業、鋳業への経済投資を促進させた。このなかで M.S. ヴォロンツォフの大きな功績は、ワイン産業の発展である。彼はヨーロッパからワイン栽培の専門家たちを招聘して、クリミアの気候と土地に適合する葡萄を選種させて、マサンドラ、アイ・ダニル、グルズフなどでワイン生産を本格的に開始した。そしてワイン貯蔵室、蒸留所、醸造所などの設備投資に M.S. ヴォロンツォフ自らが積極的に協力して、数年後にはクリミアをロシア本国へのワイン供給地として変身させたのである。この影響は今日も続いており、クリミアワインが名産品となったのは M.S. ヴォロンツォフの偉業であるとも言われている。彼はまたカフカス全権総督の経済政策において、グルジアのワイン産業を大きく発展させたことでも有名である。

ここで重要なのは、新ロシアへの入植者はあくまで自由農民や技術者に限定されていたことであり、M.S. ヴォロンツォフはロシア本国からの逃亡移民や亡命者の受け入れを頑なに拒否した。また特筆すべき点として、新ロシアでは大物資本家による農奴を用いた大規模な農業経営は禁止された。これは彼が農奴を用いた強制労働に対し政治的に反対していたことが大きな理由と考えられるが³²、これ以外にも新ロシアの「植民地」としてのあり方を、本国ロシアへの従属関係ではなくて、新ロシアの経済利益を「新ロシアのために」還元できる帝国構造を目指したものとも考えられる³³。

³² キセリョフとの往復書簡に、新ロシアでの農奴労働に反対した文書が見られる。AKB. Кн.38. Москва, 1892. С. 15-17. また M.S. ヴォロンツォフと農奴問題については、以下の文献を参照。*Авалиани С.Л. Граф М.С.Воронцов и Крестьянский Вопрос. Одесса, 1914.*

³³ これはロシア帝国の自由貿易論争を反映している。19世紀前半ロシアの自由貿易主義者は、地方の利益は「植民地」それ自体のもので、本国の利益に反しない限りで認められると考えた。これは地方都市で自由貿易によって利益を得ていた商人層から支持された考え方で、ロシア本国との自由経済関係を目指した。他方、ロシア帝国の地方を「一部」として、いわば従属的にロシア本国の利益を優先して考えた人々は、その多くがロシア本国の保護貿易主義者であり、彼らは「植民地」の自由貿易に対して批判的な立場であった。Rheinlander,

第三の文化政策では、教育政策に大きな比重が置かれた。彼は自分が私有していた蔵書をオデッサやキエフに大量に運ばせて公立図書館を開設し、現地の貴族子弟を中心にヨーロッパの学問を積極的に奨励した。また本章冒頭で示したように、プーシキンにオデッサの公立図書館を無料開放して彼の創作活動を支援しながら、彼にエカテリーナ2世時代のアルヒーフやプガチョフの乱に関する史料を研究させたことも知られる。

そしてオデッサにギムナジヤ（中等教育機関）を新設して、それ以前から存在していた貴族学校（リツェイ）とともに新ロシアに住む貴族の子弟や富裕層の子息を中心に学ばせた。また女子学校や孤児院を新設して幅広い社会層に教育を施すように取り組むとともに、農業や考古学の研究のために協会を創設した。とりわけクリミアのバフチサライ（クリム・ハーン国の首都）遺跡の発掘には、ロシア本国だけでなく外国からも専門家を呼び寄せて研究させた。

彼はまた、新ロシア地方での現地新聞の発行にも取り組んだ。特に「ヴォロンツォフ・スクール」のA.I. リョブシンとV.I. トゥマンスキーが中心的な働きをして『オデッサ通信』と『新ロシア・カレンダー』が発行された。これは新ロシアでの経済情報や文化記事を掲載したもので、ロシア本国でも新聞発行が珍しかった時代において画期的であった。彼はカフカス全権総督として、現地新聞『ザカフカス通報』と『カフカス』を発行したことで知られ、M.S. ヴォロンツォフによる統治政策の特徴としても理解することができる。これ以外の文化政策では、クリミアに私的別荘アルプカ宮殿の建設を開始し³⁴、またオデッサに国立劇場を創立して、イタリアのオペラ座を招待公演させるなどのヨーロッパ文化の振興にも貢献した³⁵。

彼はベッサラビア総督としても功績を残しており、1826年アッケルマン条約を締結してモルドヴァとワラキアにおけるオスマントルコとの共同宗主権を獲得し、1828年ニコライ1世からの直々の命令を受けてバルナ要塞を攻略した。

The incorporation of the Caucasus into the Russian Empire: The Case of Georgia, 1801-1854. Ph.D. Diss. Columbia University 1972. pp. 171-190.

³⁴ *Филатова Г.Г.* Портретная галерея Воронцовых. Вып.1. Симферополь, 1997.

³⁵ *Пряшников М.П.* Итальянская Опера в Одессе во времена генерал-губернаторства Михаила Семеновича Воронцова (1823-1844). // *Воронцовы - Два века в истории России.* Вып.6. 2001. С. 97-130.

そして1829年アドリアノーブル条約を締結して、黒海での権益を自らの手で拡大していった。

もっとも彼の新ロシア総督としての統治が、災害や疫病との戦いであったことを忘れてはならない。新ロシアへの赴任から最初の6年間はずっとイナゴの異常発生に悩まされ、そして1825年イズマイル（新ロシアの南西都市）での腺ペスト、1829年オデッサ、クリミア、ベッサラビアでの腺ペスト、1830年コレラ、1833年大凶作、そして1837年にふたたびオデッサでの腺ペストという、新ロシアでの疫病被害は惨憺たるものであった。彼はそうした中で疫病の蔓延を防ぐために、疫病の発生した都市を隔離して水路を封鎖するという当時としては珍しい科学的な対策を実施して³⁶、またヨーロッパから専門医を呼び寄せて治療に当たらせるなどの応急処置をして、被害を最小限に食い止めた。そして同時に都市計画での衛生管理の優先度を高めて、疫病の少ない都市設計を目指していった。

このように彼の新ロシア総督としての業績は、政治・経済・文化・外交・医療というとても幅広いものであり、また「ヴォロンツォフ・スクール」という人的ネットワークにおいても多大な影響を見ることができる。そして彼は新ロシアでの功績をニコライ1世から評価され、1836年元老院議員に任命された。彼のヨーロッパ啓蒙とロシア愛国心の融合した政治姿勢は、新ロシア総督という行政官としても、祖国ロシアのために十分に発揮されたと言える。

また本節では、新ロシア総督 M.S. ヴォロンツォフによる統治政策を、次節で詳しく述べるカフカス全権総督のそれとの対比で、多くの類似点を見出せたことができた。具体的には、行政政策に分類した官房の強化や宗教寛容政策、経済政策に分類した自由農民による土地開拓やワイン産業を中心とした農産業の積極的振興、蒸気船を利用した貿易ネットワークや、ヨーロッパ文明を積極的に取り入れた経済活性化の手法、そして文化政策に分類した幅広い社会層を焦点に当てた教育政策や、現地新聞の発行や国立劇場の設立などが該当する。これは新ロシアもしくはカフカスという個別の地域を対象とした統治研究では明らかにできなかった歴史学的観点であり、本論文による両方の（全権）総督に就任した M.S. ヴォロンツォフという人物に焦点を当てたことで得られた、大きな学術的成果である。そしてこの観点の創造は本研究の大きな意義である。

³⁶ Rhineland. pp. 83-84.

【第五節】カフカス全権総督時代(1845-1854)

(一) カフカスでの「内憂外患」

M.S. ヴォロンツォフがカフカス全権総督に就任する1840年代前半は、ザカフカスの政治的な不安定と北カフカスでのカフカス戦争³⁷の激化という、まさに「内憂外患」な事態がロシア帝国に重く押し掛かっていた。彼がカフカス全権総督およびカフカス軍最高司令官として赴任した歴史的経緯について、簡単に触れておきたいと思う。

第一のザカフカスでは、半世紀にも及ぶロシア帝国による統治が依然として政治的不安定を解決できずにいた。1801年9月グルジア併合以後はカフカス長官体制³⁸という、現地の長官が内政と軍事の指導的役割を担う統治体制を採用しており、1816年にカフカス長官に就任したA.P. エルモロフは、カフカス軍最高司令官とペルシア外交全権大使を兼任した³⁹。しかしながら長官体制はおよ

³⁷ ここでカフカス戦争とは、①エルモロフ長官により組織された懲罰部隊とカフカス山岳民との軍事的な衝突（1817-23）、②クラリ・マゴマ・シェイフ（イスラム神秘主義の導師）がダゲスタン南部で指揮した反乱（1825-27）、③ガジムハンマド、ガムザト・ベグ、シャミーリがイマーム（ムスリム指導者）としてダゲスタンのナクシュバンディー教団（スーフィズムの一派）を支持母体にして展開した戦争（1830-37）、④シャミーリがチェチェンを中心にゲリラ戦法で挑んだ戦争（1840-59）の総称を意味している。本論文では1825年クラリ・マゴマが主導した反乱とそれ以後のロシアとの戦争を、ミュリディズムを母体としたカフカス戦争と理解する。Блиев М.М., Дегоев В.В. Кавказская Война. Москва, 1994., Блиев М.М. Россия и Горцы Большого Кавказа на пути Цивилизации. Москва, 2004., Гордин Я.А. Кавказ : Земля и Кровь. СПб., «Звезда» 2000., Baddeley, J.F. *The Russian Conquest of the Caucasus*. Russell & Russell, 1908., Gammer, M. *Muslim Resistance to the Tsar. Shamil and the conquest of Chechnya and Dagestan*. Frank Cass, 1994.

³⁸ カフカス長官は内政と軍事の現場の最高権力者であり、その下に知事（1801年当時は内務官）が置かれ、知事を中心にグルジア最高政府が、行政局、財務局、法務局（1804年に刑事局と民事局を統廃合）という三つの部局により組織された。しかしカフカス長官は単独で法案を執行できる権限はなく、法案はすべて皇帝や国家評議会の了承を得なければならなかった。

³⁹ Whittock, M. "Ermorev: Proconsul of the Caucasus," in *The Russian Review*, 18 (January 1959) : pp. 53-60.

そ30年間で計8人の長官が交替するという政治的混乱を招いたため、一貫した政策方針を定めることができず⁴⁰、またグリア（西グルジア）では旧グルジア王族による反乱も勃発した。

こうした事態に対応すべく、1830年から元老院議員 P.I. クタイソフと E.I. メチニコフが中心となって特別委員会を設置し、中央でもザカフカスの問題が検討され始めた。そして1833年7月「ザカフカス組織委員会」がペテルブルグで創設されると、これ以降は中央の意向を反映する形でザカフカス統治が進められるようになり、カフカス長官体制それ自体は維持されたものの、あくまで組織委員会の代理機関となった。さらに1837年クールラント出身のバルト系貴族 P.V. ハン男爵が議長となって「ザカフカス最高会議」が組織されると、委員会体制によるザカフカス統治は本格化し、1840年には「カフカス統治に関する法令⁴¹」が公布されたのである。

この法令ではザカフカスを「ロシアの一部」とする中央の意向を強く反映させて、①ザカフカスを「グルジア・イメレチ県」と統一して11郡44区に分割すること、②現地人の官吏採用をやめてロシア人が公職を独占すること、③役所や裁判でのロシア語による文書主義と、トビリシ・ギムナジヤでのロシア語教育を徹底することなどが決定された。

しかしながら、ハン議長によるザカフカス統治もまた機能不全に陥った。ロシア人官吏の役職独占は行政の非効率さを招き、ロシア語による文書主義も諸手続きをいたずらに増大させた。そして行政全体の対応能力が低下して、グリアでは再び暴動が起きるといった事態にまで発展した。こうした中、ザカフカスではカフカス長官体制でもなく委員会体制でもない新しい統治システムが必要とされ、それがカフカス全権総督という新制度を生み出してゆく歴史的な経緯となったのである。

第二に、北カフカスを中心としたカフカス戦争の激化という緊迫した事態が存在した。1839年末までにロシア軍はグラッペ將軍の指揮によってアフルゴフ要塞の占領に成功し、北カフカスとダゲスタンでの優勢を占めていた。しかし1840年にチェチェンの宗教指導者タショウ・ハッジが逃走中だったイマーム・

⁴⁰ Эсадзе С.С. Историческая записка об управлении Кавказом. Тифлис, 1907., Rhineland. *The incorporation.*

⁴¹ ПСЗ. Т-64. №13368. 13413. (1840).

シャミーリ⁴²を受け入れて支援を約束したことで形勢は逆転し、彼の主導したミュリディズムは再び息を吹き返した。そしてチェチェンを支持母体として、シャミーリは山奥に隠れて小規模な戦闘を繰り返すゲリラ戦法でのロシア軍との長期戦に挑んだ。これは北カフカスの地の利を生かした作戦であった。また1841年アヴァール・ハン国ハジ・ムラートを味方にすることでダゲスタンにも勢力を拡大し、1844年にはダルゴ要塞を拠点としたチェチェンとダゲスタンのイママト（ムスリム国家）として、ロシア帝国における北カフカス最大の脅威となったのである。

こうした北カフカスでの緊急事態に、ニコライ1世はカフカス戦争を終結させることがロシア帝国の最優先課題であることを確認し、また時を同じくして混乱の続くザカフカスの内政にも対処しうる統治システムを再構築する必要性に迫られた。つまりこれらの歴史的経緯が、カフカス戦争を終結させられる軍人でありながらザカフカスの内政にも対応できる「輝かしい軍事的栄光と行政能力を兼ね備えた人物⁴³」のカフカス赴任を、ロシア帝国に迫ったのである。

そして1844年11月17日深夜、ヤルタにあるアルプカ宮殿にニコライ1世からの私的な文書が届いた。文書ではM.S. ヴォロンツォフのロシア帝国に対する長年の忠誠への賛美と敬意が示されながら、シャミーリを「文明の敵 *изувер*」と表現してカフカスの将来を憂い、ニコライ1世自らの言葉で「カフカス軍最高司令官そして全権総督 *главнокомандующий войск на Кавказе и наместник мой в сих областях, с неограниченным полномочиём*⁴⁴」への就任が要請された。この人事はあくまで「彼の同意」を前提としており、また新

⁴² 1797年ダゲスタン・ギムラ村生まれ。幼少よりアラビア語とコーランを学び、また体格にも恵まれて剣術に秀でていた。1824年ガジ・クフムにてジャマール・アルディンと出会ってナクシュバンディー教団に加わり、初代イマームとともにロシア軍への戦いに挑む。1834年9月から三代目イマームとなる。*Дегоев В.В. Имам Шамиль. Пророк, Властитель, Воин. Москва 2001., Zelkina, A. In Quest for God and Freedom: The Sufi Response to the Russian Advance in the North Caucasus. N.Y. University Press, 2000.*

⁴³ АКВ. Кн.40. Москва 1895. С. 499. 全権総督の人事は、最初D.A. ゲルシュテインツベイク将軍に要請されたが、健康不良を理由に拒否された。その後A.P. エルモロフの再起用が叫ばれたが、ニコライ1世が「行政能力のある軍人」という理由で、M.S. ヴォロンツォフを任命したとされる。

⁴⁴ Там же. С. 499. 同文書では「三年間以上」という期限も明記された。

ロシア総督との兼任が約束されたものであった。

当初 M.S. ヴォロンツォフは62歳という高齢と視力低下などの病気を理由に就任を固辞したが、同年12月27日「もしツァーリが望んだところに行かねば、私はロシア人ではない⁴⁵」という決断とともに、新ロシア総督を兼任する形でカフカス全権総督およびカフカス軍最高司令官に就任した。これは当時のロシア帝国においては前例のない人事かつ制度であり、ロシア帝国において現地の最高権力者が皇帝の代理人として権限を行使できることを保証されたことを意味した。

そして1845年1月30日バテルブルグにおいて正式にカフカス全権総督の勅書を受け取り、その場で全権総督の強力な権限が確認された。これは全権総督が制度的保障だけでなく、ニコライ1世からの全幅の信頼に基づいた人事であることを裏づけた。

（二）ザカフカスでの「新統治」

1845年3月25日チフリス⁴⁶に到着した M.S. ヴォロンツォフは、ダルゴ戦役（次項）以後、チフリスでのザカフカス統治に集中した。そして彼の行政キャリアの集大成とも言える、彼の人的・物的ネットワークと啓蒙主義を最大限に活用した「新統治」によって、ザカフカスは政治的安定を手に入れ、ザカフカスにとって重要な歴史的基盤を培った。以下、カフカス全権総督の統治政策を新ロシアと同様、行政、経済、文化の三つに分けて見てゆく。

第一の行政政策では、彼はまず総督府の権限を強化するためにチェルヌイシヨフ陸軍大臣が議長を勤めていた「カフカス委員会」の政治活動を制限し、あくまで全権総督の補助機関として位置づけた⁴⁷。そして1842年ザカフカス調査のために臨時創設された「皇帝直属官房第六部」を廃止して、行政スタッフ強化のために新しい官房の設置と、有能なロシア人官吏とグルジア貴族で構成

⁴⁵ Воспоминания М.П.Щербинина. // Русский Архив. 1876. Кн.3. С. 300.

⁴⁶ Выписки из дневника светлейшего князя М.С.Воронцова. С 1845 по 1854 год. СПб., 1902. С. 1. 彼の就任とともにトビリシはロシア語読みに変えられて「チフリス」となった。

⁴⁷ Лисицына Г.Г. Кавказский Комитет - Высшее Государственное учреждение для управления кавказом (1845-1882). // Россия и Кавказ. Сквозь два столетия. СПб., 2001. С. 154-168.

したカフカス最高評議会を組織した。

つぎに、ハン議長時代とは異なる形で県制度の導入を改めて実行し、チフリス、クタイシ、シエマハ（アゼルバイジャン）、デルベント、エリヴァンというカフカスの伝統的な地域区画に応じて五つの県を設置した。そして五つの県それぞれに県庁、県裁判所、県警察署を設けて各県での自治体制を強化しながらザカフカス統治の効率化を計り、とりわけグリアを含めた西グルジアの治安の安定化につとめた。またザカフカス現地人の採用枠を設けるなど積極的な人材登用を行い、それに合わせてロシア語による文書主義を廃止するとともに、手続きの簡素化・合理化を実施して、官吏出費の削減を進めた。

第三に、チフリスとクタイシに「グルジア貴族の戸籍調査に関する特別委員会」を設置して、ザカフカスに居住する全ての氏族、部族、拡大家族を家族単位で登録させた。これはグルジア貴族の身分保障および領主権の確定という、ザカフカス統治のなかで長年のあいだ解決されなかった問題に対処することを目的として、全ての貴族を以下の五つに分類した⁴⁸。

[特別委員会によるグルジア貴族の分類]

- a. 貴族または旧グルジア王国の封臣で、カフカス最高評議会により了承されたもの。
- b. 貴族身分は明確であるが、調査を必要として了承されるもの。
- c. 貴族身分それ自体に調査が必要なもの。
- d. イメレチやグリアの貴族で、身分調査が必要なもの。
- e. 特別委員会とカフカス最高評議会によって貴族身分を否決されたもの。

このうち a. と b. は、ロシア帝国内のグルジア貴族として正式に認められ、家紋が登録された。ザカフカスにおいてグルジア貴族の身分保障は領主権の確定をも意味しており、貴族身分が認められなかったものは必然的に領主権を失ったが、M.S. ヴォロンツォフは彼らを自由農民として保護することで、農業、林業、産業の労働力として活用した。

また別の委員会では、グルジアの伝統的慣習法であるヴァフタン法のロシア語翻訳について改めて検討がなされた。ヴァフタン法はもともと1735年モスク

⁴⁸ AKAK. T.10. C. 46-47.

ワに亡命したグルジア王族ヴァフタン6世が制定した民事慣習法で、グルジア併合以後は刑事裁判にはロシア法が適用され、民事裁判にはヴァフタン法が適用されるという法的慣習が継続していた。ロシア語翻訳はA.D. エルモロフ長官時代に大半が完成していたが⁴⁹、M.S. ヴォロンツォフはこの翻訳を再検討した上で、ザカフカス統治において実用できる条項に関してはザカフカスの伝統的慣習としてロシア帝国でも尊重することを約束した。この結果として、灌漑や水利権に関するグルジア慣習法の一部がロシア民法典に書き加えられることが決定した⁵⁰。

第二の経済政策では、前述の特別委員会での決定によって貴族身分を剥奪された旧グルジア貴族や自由農民たちを利用した農地開拓に取り組み、とりわけクリミアと同じくグルジアでのワイン産業やアルメニアでのコニャック産業を積極的に発展させた。グルジアはもともと世界最古のワイン生産地の一つとして知られており、紀元前から「クレオパトラの涙」として葡萄の良質さが有名であった。彼はワイン産業を「ザカフカスの税収増加のため⁵¹」発展させることを目的して、ウォッカや果実ウォッカを含めた酒類産業を奨励した。そしてワインやウォッカの独占販売権をチフリスから各都市に譲渡することで、地方が自主的に酒類産業を育成できるよう促した。またワインの品質を等級ごとに分けることでロシア本国やヨーロッパへの輸出を増大させ、ザカフカスの酒類産業を飛躍的に発展させたのである。

これ以外の経済政策では、チフリスで本格的な銀行業務を開始して、ロシア人投資家だけではなくグルジア貴族にも資金を提供することで経済活動を促進させた。またチフリスを中心にザカフカスでの自由貿易を奨励して、毎年10月1日から11月まではカフカス定期市（ヤルマルカ）を開催した⁵²。この定期市

⁴⁹ グルジア人学者 I.G. チリアエフによって1825年にロシア語翻訳は完成したが、時代に合わない条項が多いという理由で、ロシア法への適用については見送られていた。

⁵⁰ ПСЗ. Т.83. (1859).

⁵¹ 酒税を上げることで総税収の増大と産業の発展が図られた。例えばワインには1ヴェドロ（ロシアの容積の単位：およそ12、3リットル）当たり60カペイカから1ルーブル、果実ウォッカには30カペイカから60カペイカの増税がなされた。АКАК. Т.10. С. 17-20.

⁵² Там же. С. 60. 日曜日にはバザールも開催された。

にはチフリスを中心に経済活動していたアルメニア商人だけではなく、多くのロシア商人も参加した。またザカフカスでの鉱山の発掘にも取り組み、新ロシア時代から仕事をともにしたオランダ人技師ウィッテ (S.Y. ウィッテの父親) を招聘して、銀や鉛などの採掘を経済的に支援した。そしてザカフカス都市間の交通インフラの整備⁵³ (グルジア軍用道路を含む) や、テレク川とスンジャ川の河川工事や橋梁建設を進めることで、黒海とカスピ海を陸路と水路で結ぶように尽力し、またクラ川を利用した蒸気船の運航も開始された⁵⁴。

第三の文化政策では、新ロシア総督としての政策体系と同様、第一に教育政策が大きな比重を占めていた。M.S. ヴォロンツォフ全権総督はまず、S.S. ウヴァーロフ教育大臣と親交のあった V.N. セミョーノフをトビリシ・ギムナジヤの新しい校長に任命し、1848年「カフカス教育管区規定⁵⁵」を制定した。そして中央とは異なる独自の教育システムを導入したのである。この「規定」では教育管区を新しい県制度に対応させて五つに分割し、各区に一つずつギムナジヤが創設された。そして全ての学生にロシア語と現地語が必修科目として課され⁵⁶、カフカス史が世界史、ロシア史とともに歴史科目に追加された。これ以外では農学、建築学、地理学、簿記、数学などの一般科目が設けられ、必要に応じてラテン語、フランス語、ドイツ語が課された。ラテン語はギムナジヤを卒業した学生がロシア本国の高等教育機関に進学するための受験科目で、ドイツ語は医学を勉強する学生への必須科目であった。

つぎに郡学校では、それぞれの学生の要望に応じた教育カリキュラムが組み立てられ、言語指導には再びランカスター方式が採用された。そしてギムナジヤへの入学を希望する貴族の子弟にはその準備教育が施され、郊外のグルジア貴族の子弟には技術系の実践的な教育が施された⁵⁷。また1849年にはギムナジヤの卒業生を対象とした専門学校がチフリスとクタイシに設立されて、約60人の卒業生に奨学金が付与された。

さらに聖ニーナ慈善協会を設立し、妻エリザベータを名誉校長とする初等教

⁵³ Там же. С. 55-58.

⁵⁴ Там же. С. 17.

⁵⁵ Там же. С. 854-856., ПСЗ. Т.72. №. 21870 (1848).

⁵⁶ チフリス・ギムナジヤではグルジア語とアゼルバイジャン語、クタイシ・ギムナジヤではグルジア語とチュルク語が教えられた。Там ж. С. 854.

⁵⁷ Там же. С. 855.

育機関を創設したのも大きな功績である⁵⁸。これは主に貧しいキリスト教徒の子女を対象にして宗教、歴史、地理、算術、ロシア語、ザカフカスの伝統工芸である織物を学習させ、1848年にはチフリス以外のクタイシとシエマハにも創設された。この慈善活動はアレクサンドラ皇后からも支持されて、資金的な援助も見られた。

これ以外では、商業ギムナジヤがチフリスで開校され、エリヴァンではアルメニア人子息を対象にした貿易商業学校、そして東カフカス地区ではムスリム子息のための学校も設立された⁵⁹。こうした幅広い社会層に教育を施すという政策は、まさに M.S. ヴォロンツォフ個人の政治姿勢の反映とも見られる。

つぎに新ロシアでも見られた、現地新聞の発行が注目できる。これは正確に言うとザカフカスでの現地新聞の「復興」であり、ロシア語の普及という統治政策としての目的以外に、グルジア文化を現地新聞という活字媒体を通して発展させるという大きな歴史的意味を有した。そして結果としてグルジア文学は、後述するように、ロシア帝国の中でキリスト教の影響を強調した歴史観を創出しながら、その成長を遂げた。これは M.S. ヴォロンツォフ全権総督の大きな功績であると考えられる。

元々ザカフカスでは、I.F. パシケヴィッチ長官のもとで1828年7月『チフリス報知』という現地新聞が発行されていた。これは主にザカフカスの近況やカフカス戦争での死傷者を伝える官報に相当するものであり、極めて形式的な内容であった⁶⁰。しかし初代編集長 P.S. サンコフスキーが劇作家グリボエドフ、プーシキン、ブルチェフなどに原稿を依頼して論争的な記事を掲載するようになると、論者同士の活発な意見の交換が紙面で見られるようになった。そして副編集長ゴルディエフが就任して『トビリシ新聞』を作成し始めると、グルジア人ソロモン・ドダシヴィリが中心となって『チフリス報知』の原稿をグルジア語に翻訳し、またアレクサンドル・チャウチャワゼによってプーシキンの詩作やグリボエドフ『知恵の悲しみ』が紹介された。

しかしながら1830年ヨーロッパ革命に対する反動から、ロシア全土で出版物に対する検閲が始まると『チフリス報知』副編集長であったシュホルコフがデ

⁵⁸ Там же. С. 856.

⁵⁹ Там же. С. 855-856.

⁶⁰ Газета «Кавказ» 1846-1901. Тифлис, 1901.

カプリストとの嫌疑で逮捕され、1831年『チフリス報知』の原稿の大半が没収されてしまった。また1832年には西グルジアで反乱が起こり、それに加担したS. ドダシビリが亡命すると『トビリシ新聞』も廃刊となった。

M.S. ヴォロンツォフ全権総督の新聞政策は、こうしたザカフカスでの現地新聞の復興が目的であった。そして1845年『ザカフカス通報 Закавказский Вестник⁶¹』とその補完紙として『カフカス Кавказ』が発行された。前者の『ザカフカス通報』は新しい編集長にプラトン・ヨセリアニが就任して、官職の公示などの形式的な内容だけではなく政治・経済・文化などの幅広いジャンルの記事が掲載された。とりわけグルジアの歴史に関する記事では、グルジアとキリスト教を密接に関連させる歴史観によって、4世紀前半イペリア(カルトリ)王がキリスト教を国教とした歴史について、バグラト王朝タマーラ女王(在位1184-1213)時代のショタ・ルスタヴェリ⁶²のグルジア文学の水準の高さなどが紙面で多く語られた。こうしたグルジアとキリスト教との関係性を解釈することは、グルジア文化の歴史的起源を求めながら、キリスト教を媒介としたグルジアとロシアとの親和性を強調することにも寄与したと考えられる⁶³。

他方、補完紙であった『カフカス』は民間の新聞として創刊され、編集長オシプ・コンスタチノフによって新聞発行が「全権総督を許可を得て」決定された。そして1846年第1号では、ニコライ1世の直々の御言葉を本紙の目的として掲載して「同国人 соотечественников に対し、好奇心に富んだ地域(カフカス—筆者)に見識を深めることで(中略)、産業や商業の歴史的源泉や信仰を明らかにする。そしてカフカスでのロシア政府の方法や行動を明らかにし、我々が国家の恩恵という真の目的を明らかにする」と紹介された⁶⁴。そしてコンスタチノフ編集長が中心となり歴史学、地理学、民俗学、動物学、植物学、天文学、法学、経済学、農学、工学、海洋学などの様々なテーマの記事が掲載されたほか、前述したチフリスとクタイシでのグルジア貴族の認定委員会に関する記事

⁶¹ 初版は1838年だが当時は官職や軍隊の編成などが掲載されていただけで、目立った特徴はなかった。*Махаразде Н.А. Русская Газета на Кавказе в 40-50х годах XIX Века. Изд. Тбилисского Университета, 1984. С. 9.*

⁶² ショタ・ルスタヴェリ『虎皮の騎士：ショタ・ルスタヴェリの叙事詩』袋一平訳(理論社1972)。

⁶³ Махаразде Н.А. Указ.соч. С. 80-96.

⁶⁴ Газета «Кавказ». №1. 1846.

や、エリヴァンでの定期市の開催日時なども掲載された⁶⁵。

これ以外の出版物では、毎年『カフカス・カレンダー』が発行されて、ザカフカス統治に関わるロシア人官吏の名簿や、統計資料などが掲載された。また1852年グルジア語で『夜明け Tsiskari』という月刊誌が発行され、編集長にはグレゴリー・エリスタヴィが就任した。この出版にはグルジア知識人たちが編集スタッフとして加わり、ショタ・ルスタヴェリやグリボエドフの著作などが数多く紹介された。

このように、ザカフカスでの教育政策や現地新聞の発行を通して、グルジアを中心とした多くの「民族（ネイション）⁶⁶」文化がロシア帝国内の現地文化として発展を遂げることになり、ザカフカスはM.S. ヴォロンツォフのヨーロッパ啓蒙という影響を受けながら、その多民族的な特徴を維持した。M.S. ヴォロンツォフ研究者であるラインランダー氏は「もし彼（M.S. ヴォロンツォフ—筆者）がいなければ（中略）、グルジア社会はこの近代文化発展の重大な時期を失っていた」として、彼の個人的な資質を高く評価している⁶⁷。

その他の文化政策では、1850年に帝国地理協会のカフカス支部が設置され、カフカス全体の地図作成が本格的に取り組まれた。そしてチフリスに博物館や公立図書館が設置され、ロシア官吏やグルジア貴族に開放された。またフランス人考古学者ブラッセがロシア教育省からチフリスに派遣され、カフカス古銭の研究などが進められた。

さらに1850年チフリスでの国立劇場の新設に伴って、グルジア演劇が再開された。演劇はエクレレ王朝時代にグルジアの伝統として盛んであったが、ロシア帝国によって禁止されていた。M.S. ヴォロンツォフは演劇の再開を積極的に支援して、グレゴリー・エリスタヴィ脚本による演目『ガクラ Gakra』を国立劇場で上演させたのである。そしてM.S. ヴォロンツォフはこの上演の成功をととても喜んで「グルジアのモリエール（であるエリスタヴィ—筆者）が素晴らしいグルジア人の感情を、彼らの言葉と文学の優雅さによって表現した」と絶

⁶⁵ *Махаразде Н.А. Указ.соч. С. 107-108.*

⁶⁶ 本論文では「民族」を、政治的な「歴史の創造」によって構築された、神話や価値を共有した民俗集団であると定義する。そしてロシア帝国によるグルジアとキリスト教との関係を結びつけた「歴史の創造」は、政治的な民族形成の側面があったと指摘できる。

⁶⁷ Rhinelander. *The incorporation*. p. 334.

賛した⁶⁸。この劇場ではその後、イタリアのオペラ一座が招待公演したときに利用されるなどの、ヨーロッパ文化の振興にも大きな貢献をした⁶⁹。

こうした様々な統治政策によって、ザカフカスはチフリスを中心とした政治的安定を構築することができた。そしてロシア帝国は M.S. ヴォロンツォフという全権総督を通して支配を確立することで、ザカフカス諸民族の歴史や文化に大きな影響を残したのである。ゆえにこの観点から、彼個人の特性とザカフカス統治を関連させて研究する必要性は明らかであり、特に新ロシア時代の統治政策との類似は注目に値する。

(三) カフカス戦争での「新戦略」

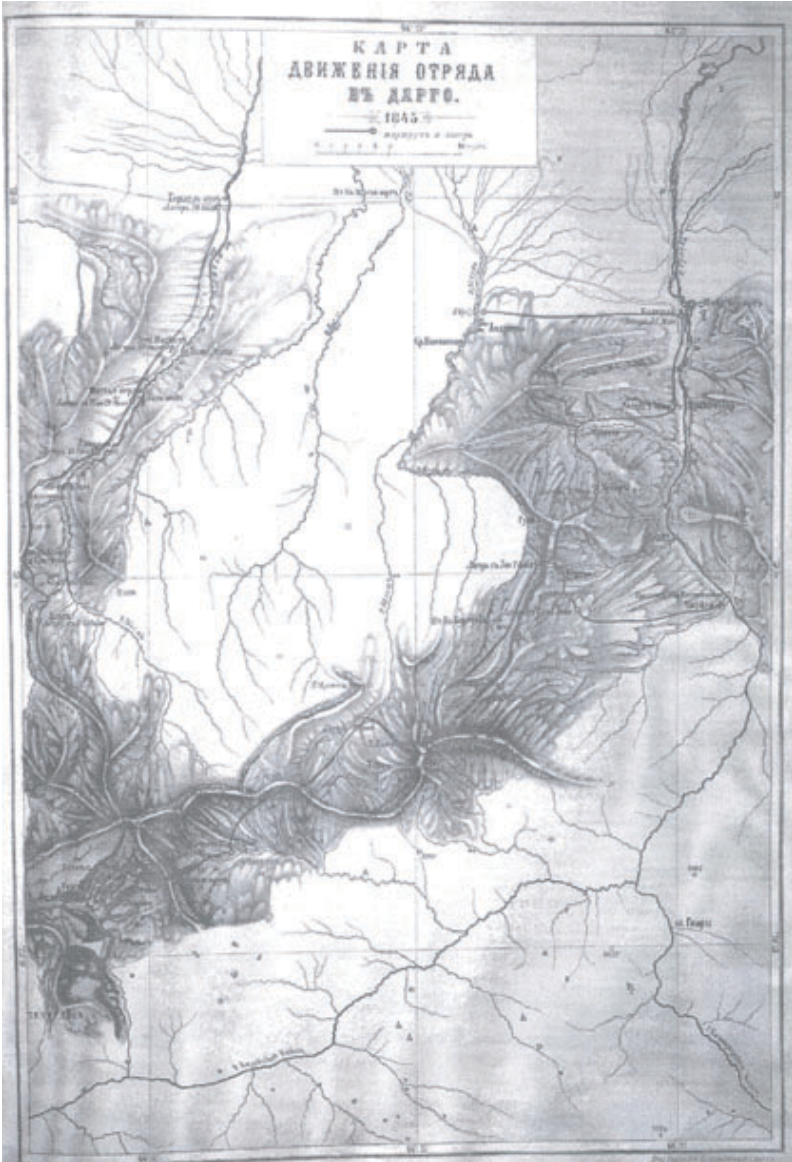
カフカス軍最高司令官としての M.S. ヴォロンツォフは、1845年4月末からカフカス戦争の前線に向かい、スンジャ川前線、グロズヌイ要塞、ヴォズドゥビジェンスコエ要塞、北ダゲスタン前線をそれぞれ視察し、特にカフカス左軍（東軍）と北ダゲスタン前線を入念に視察した。そして5月31日ブネザップ要塞からシャミーリの本拠地であるダルゴ要塞へ向けて総攻撃を開始した⁷⁰。もっともこの戦争計画は、彼の就任前にニコライ1世を中心にペテルブルグですでに決定されていたもので、当初彼はこのダルゴへの総攻撃には反対していたとされる⁷¹。しかしながら、北カフカスでの緊急事態を前にニコライ1世の命令には逆らえず、そのまま元の計画通りに行軍した。

カフカス左軍はチルキュルト、フバルを次々と攻略して、6月3日にゲルトメ要塞を占領した。そしてアンチミル到着後は、14日にミュリディズムの重要な拠点であったアンディ要塞を占領することに成功した（次頁地図）。しかしながらこの時点でシャミーリはすでに退却しており、また要塞の占領についても

⁶⁸ Там же. С. 881-882.

⁶⁹ チフリスでのオペラ公演には、M.S. ヴォロンツォフが文書にてロシア帝国劇場支配人であったゲデオノフに協力を要請するなど、かなり積極的な取り組みであったことがわかる。なお公演では、ロッシェニ「セビージャの理髪師」やドニゼッティ「ドン・パスクアーレ」などが演奏された。また1853年にはバレエ公演も実施された。AKAK. T-10. C.9, 51-52., Jersild, A. *Orientalism and Empire, North Caucasus Mountain Peoples and the Georgian Frontier, 1845-1917*. McGill-Queen's University Press, 2002. pp. 63-65.

⁷⁰ AKAK. T-10. C.I-III.



出典：АКАК. Т.10. С. 400-401.

カフカス山岳民によってすでに放棄されていたものが大半であったため、ロシア軍の戦果はさほど大きくなかった。むしろ M.S. ヴォロンツォフの率いたカフカス左軍は、アンディ要塞で駐留している間にカフカス山岳民たちに完全に包囲されてしまい、シャミーリの「ゲリラ戦法」の仕掛けた罠に陥ってしまった。

そしてロシア軍が7月6日ダルゴ要塞への総攻撃を開始したときには、シャミーリはすでに逃走しており、ダルゴ要塞を炎上陥落させることには成功したもの、カフカス山岳民による山林からの相次ぐ急襲によって、カフカス左軍は甚大な被害を受けた。続く7日にはロシア軍供給部隊が再び奇襲攻撃によって大打撃を受けて、多くの死傷者を出すことになった。そして連日のカフカス山岳民による急襲によってロシア軍は窮地に追い込まれたが、7月19日フレイタグ将軍が M.S. ヴォロンツォフとカフカス左軍を辛うじて救援し、翌20日ゲルゼリ集落（アウル）に退却することで、一命を取りとめた⁷²。

これが後に「乾パン遠征 *сухарная экспедиция*」として有名なダルゴ戦役であり、この大会戦で M.S. ヴォロンツォフの率いたロシア軍は大敗を喫した。これはシャミーリによるゲリラ戦法の勝利であり、これによりチェチェンでの更なる支持を獲得した。

M.S. ヴォロンツォフはこの敗戦後、同年9月セバストポリを訪れたニコライ1世と会談して、ダルゴ戦役のような大会戦での北カフカスの征服は不可能であり、かつてエルモロフ長官が実行したような⁷³、シャミーリを包囲作戦で追い詰めながら、小規模な会戦を繰り返すという、長期的な戦争計画によって北カフカスを攻略する「新戦略」が必要であると説得した。彼は従来の戦略を改めて、シャミーリとミュリディズムを「封じ込める」ことでカフカス戦争での勝機を見出したのである。

具体的な戦略として、第一に「如何なる状況でも、我々（ロシア—筆者）の

⁷¹ Дегоев В.В. Три силуэта Кавказской войны: А.П.Ермолов, М.С.Воронцо, А.И.Барятинский. // Большая Игра на Кавказе: история и современность. Москва, 2001. С. 176.

⁷² Выписки из дневника. С. 5-6.

⁷³ 彼の「新戦略」をエルモロフの戦略との類似で指摘する研究は多く、デゴージェフ氏は「エルモロフ式」と説明する。Дегоев В.В. Три силуэта С. 179.

軍隊が動けるよう」という目的から、チェチェンでの山林を大規模に伐採して更地を拡張していった⁷⁴。森林を伐採することはロシア軍の機動力を高め、銃兵や砲兵による攻撃を効果的に活用することだけではなく、カフカス山岳民の生活圏を奪うことで彼らの急襲を防ぐという戦略的效果を有しており、文字通り「斧の戦略 The system of Axe⁷⁵」が開始されたのである。

次に山林を伐採した土地に新しい要塞を建設して、北カフカス前線でのシャミーリ包囲網を固めていった。具体的にはチルユルト（1845年）、ハサビユルト（1846年）、アチホイ（1846年）、ウルスマルトン（1848年）などが新しく建設され、またグルジア軍用道路や要塞間の幹線道路の整備も進められた。そしてグロズヌイ要塞、ブネザップヌイ要塞、ヴォズドゥビジェンスコエ要塞などの既存の要塞の修復・再建も行われた。またこれと連動して、黒海を封鎖してシャミーリの食糧輸送を絶つこともなされた⁷⁶。

そして「包囲作戦」という布陣の下で、カフカス左軍による遠征が断続的に開始されていった。特に「新戦略」では、北カフカスの気候を反映して戦争時期が決定され、チェチェンという山地で森林の多い地域には「森林の落葉する秋と冬」に行軍し、北ダゲスタンには「夏に行軍する」のが望ましいとされた⁷⁷。こうした現場の状況を十分に考慮した戦争計画によって、ロシア軍は1847年9月サルト要塞（チェチェン秋）、1848年7月ゲルゲブリ要塞（ダゲスタン夏）をそれぞれ攻略することに成功し、シャミーリやカフカス山岳民たちを奥地へと追いやったのである。

また M.S. ヴォロンツォフの「新戦略」は、軍事的作戦ばかりでなく、相手の士気を低下させるような「精神的な征服」を目指していた点でも注目できる。彼はダルゴ敗戦後チフリスに戻ってから、カフカス軍の士気と規律を根本から正すため、軍隊内の不正を厳しく処罰し、軍服の新調し、兵隊同士の精神の一体性を高めようとした。そして彼は「もしここ（カフカス—筆者）で法律の執行だけが必要ならば、皇帝はここに私ではなく『法律大全』を派遣したことだろう⁷⁸」として、カフカス軍最高司令官としての権限を、彼自身の政治的手法に

⁷⁴ АКАК. Т.10. С. VI.

⁷⁵ Gammer. p. 174.

⁷⁶ Дегоев В.В. Три силуэта. С. 180.

⁷⁷ АКАК. Т.10. С. XI.

⁷⁸ Русский Архив. 1884. Кн.1. С. 379.

よって発揮した。

M.S. ヴォロンツォフはカフカス戦争の終結のため、征服したカフカス山岳民との友好関係を維持することを重要視した。そして「イスラム教の危険からキリスト教徒（ロシア軍兵士一筆者）を守ること⁷⁹⁾」を条件としながら、カフカス山岳民への強制的なキリスト教への改宗を回避して、イスラム教がロシア帝国への「敵意」に結びつかない範囲で信仰の自由を認めたのである。また反戦プロパガンダによって、ロシアとの戦争を止めるようにカフカス山岳民に呼びかけ、シャミーリと一部の狂信主義者だけが「ロシアの敵」であって、それ以外の大半のカフカス山岳民はロシア帝国内での安全を保障されるという、情報を巧みに利用した心理作戦を実行した。これはミュリディズムの士気を抑えながら、彼らの一体性を分裂させるように仕向けたものであった。そしてシャミーリに味方したロシア軍からの脱走兵たちに逃亡罪を軽減（通常は死罪）するという条件でロシアへの帰還を促したり、更にはカフカス山岳民との通商関係の構築をするなど、ロシア帝国への「取り込み」を行ったのである⁸⁰⁾。

ここで重要な点として、前項で詳述したザカフカスの政治的安定を構築することが、シャミーリに対抗するため、ロシア帝国のカフカスでの一体性を確保するという、戦略的効果があったことも忘れてはならない。つまり、彼のカフカス軍最高司令官としての「新戦略」は、カフカス全権総督を兼任した M.S. ヴォロンツォフという人物によってのみ可能であったカフカス全体の統治政策であったと指摘できる。

彼のこうした「新戦略」は功を奏して、彼の在任中にカフカス戦争におけるロシア軍の優勢は決定的となり、1859年8月シャミーリはグニブ要塞で降伏し、40年近くに及んだカフカス戦争はついに終結した。この大戦果に M.S. ヴォロンツォフの「新戦略」が多大な貢献をしたことは言うまでもない。

【第六節】 総督引退と晩年(1854-1856)

彼の晩年を訪れたのは、1853年クリミア戦争であった。彼は祖国ロシアとイ

⁷⁹⁾ Движение горцов Северо-восточного Кавказа в 20-50 гг. XX века. // Сборник документов. Махачикала, 1959. С. 555-558.

⁸⁰⁾ Там же. С. 179-181.

ギリスが戦争を開始したことに困惑し、当時のイギリス陸軍大臣で彼の甥に当たるシドニー・ハーバードに、ロシアとの戦争を中止するように呼び掛けた⁸¹。この戦争は奇しくも、親英派であった彼が新ロシア総督として政治経済的な発展を遂げることに成功したクリミアや黒海沿岸を主戦場としたものであり、イギリスによってロシアが敗戦を迎えるという歴史の皮肉でもあった。

そしてM.S. ヴォロンツォフは1854年3月、病気を理由にカフカス全権総督を正式に辞任して、自分の後任にカフカス軍将校 A.I. バリャチンスキーを任命した。その後ドレスデンで静養しながら、同年10月すべての公務から引退した。そして1856年8月アレクサンドル2世によって念願だった陸軍元帥に任命され、同年11月6日オデッサで亡くなった。享年74歳であった。彼の葬儀はオデッサ大聖堂で行われた。そして1867年3月25日、彼のカフカス全権総督としての栄誉を讃えて、彼がカフカスに赴任した日から22年目を記念して、チフリスに記念像が建てられたのである⁸²。

【小 括】 M.S. ヴォロンツォフ研究の意義

本章ではM.S. ヴォロンツォフという、一人のロシア人帝国官吏の略歴を追いつながら、彼の行政軍事キャリアに一貫した、ヨーロッパに通暁した人的・物的ネットワークと、啓蒙主義という二つの特徴を見出した。これは私の研究課題であるM.S. ヴォロンツォフのカフカス統治研究を今後さらに進める上で、彼の政治姿勢を前提としながら研究できるという意味から、大きな礎となった。

最後に、M.S. ヴォロンツォフの存在した歴史的効果について考察する。彼は自分が幼少より慣れ親しんだヨーロッパ社会の気風を好みながら、それを自身の政治姿勢として新ロシアやカフカスというロシアのフロンティアで体現していった。これはロシア帝国への大きな挑戦でありながら、同時に祖国ロシアへの愛国心でもあった。また彼が提唱した農奴解放は、1861年アレクサンドル2世によって実現された。これらに注目すると、彼は19世紀前半にロシアをヨーロッパに近づけようとした人物として歴史的に位置づけられる。彼のロシア帝

⁸¹ Rhielandner. *Prince Michael Vorontsov*. p. 201.

⁸² Открытие Памятника в Тифлисе светлейшему князю Михаилу Семеновичу Воронцову 25 Марта 1867 года. Тифлис, 1867.

国に残した「政治的遺産」を研究することも、本研究の大きな対象であり、今後の研究課題として大きく取り上げたいと考えている。

(次号へつづく)